Hideki MATSUKAWA 松川 秀樹
社会学部社会情報学科教授

資質や能力を伸ばす教養と情緒の可能性

1 はじめに

社会の中で教育の意味や役割は時代とともに変遷し拡大していく。当然のことである。昔日、寺子屋で読み・書きを中心に学んでいた時代は、文字どおりの「読み・書き」というリテラシーを伝授することが目的であった。子どもたちは貪欲に漢字を覚え、足し算・引き算ができた時には感動さえもあったろう。時代錯誤なことを述べるつもりはないが、食べること・生活することを成り立たせることが第一優先であった時代では、生活に直結するリテラシーとしての基礎学力やスキルの獲得は必須かつ必死であり、真剣味は鬼気迫るものであったのではないか。

現代社会では生活に苦労する人々も存在するが、先進

国の広い一般層は明日の食べ物に困ることはない。このような時代では生きることや食べること、つまり生存・生命維持を第一とした根源的な生活より、それらの安定基盤の上に成り立つ付加価値をよしとする充足感を求めるようになる。時には他者との対比による優越感に充足感を見出す場合や、科学的に健康に良いことをするなどの自己満足であるかもしれない。学ぶことは生きる糧であったが、現在は個々人の充足感を満たすための手段に変化しているのではないだろうか。

このような社会変化を考えると、現代の教育には膨大な付加価値を理解させる、また付加価値を生み出す知識やスキルの学びが求められ、その役目の大きさには目が眩んでしまう。一人一人の自己充足感を満たすためにはリテラシー教育は（本来的な役目が忘れられて）脇におかれ、個性を伸ばすことや学んだ先の結果がより重視される。教養や豊かな情緒を育む即効性に乏しい学びより、資格取得や将来の職業に直結したスキル、また実社会の集団活動を想定した相互学習やアクティブラーニングなどが尊重されていく。これらは一人一人が教養や情緒をしっかりと獲得した延長線上であればその効果は計り知れないものとなる。学びに対する資質や能力が余りにも未完成のままで他者との関係性の中に放り込まれた場合、他者への依存、傍観や無関心、優越感・劣等感の拡大など負の方向への懸念はないのだろうか。

どこまで教育の役目は拡張していくのだろう。現代の教育を悲観的に述べるつもりはないが、時には教育の意味や役割を原点回帰して考えることで、目の前で展開されている教育の望ましい姿を模索できればと思うだけである。

2 資質・能力と教養

芸能界に教養が豊かな高学歴タレントといわれる人がいるが、最近は彼らが活躍する知識や教養を問うクイズ番組が盛んである。東大生が考えたクイズを出題する番組もありと、教養を題材にテレビ番組が制作される風潮には何らかの要因があると思われる。個性重視の中で教養や知識が軽視される中、純粋に教養を競うことの新たな知の発見への面白みと、単なる勉強ができる、できないではない知識の深みに対する家庭の共感を得やすいことがその要因か。一説にネットに押されたテレビが視聴率低下を解消するために子どもと安心して見られる内容に落ち着いたという意見もある。爆発的なヒットをしないが安心感があり、ちょっと勉強した感覚にもなることが親世代に受ける秘訣だろう。

教養とは何を意味するか。辞書では学びから得る知識による理解力や心の豊かさ、社会で生きるための広い知識などと紹介されている。生きるための広い知識とはその時代に応じた社会適用能力であり技術も含まれるが、時代と自分の置かれる立場や何をすべきか、といった点を客観的に考えられる力ではないだろうか。

そのためには生物学的な自分とは何か、自分たちの種はどのように歴史を歩んできたか、自分を含めた自然界や宇宙・物理的なものの存在とは何か、政治や経済という社会を構成するものごとは何か、環境維持や超高齢社会という社会的課題は何か、その解決策はと挙げればキリがない。しかしながら、自己のポジショニングを正確に捉えて、その上でどのような生を、人生を展開するかと考えるならば、その教養は学び尽くしても学びきれず、どのような教養も無駄とはいえないだろう。これらは幼少から青年期の特定の時期に集中して学ぶことではなく、初等教育から高等教育はもとより生涯にわたって総合的に身につけるべきことである。また学校という場のみならず、家庭や地域社会、報道や活字から得る社会状況を学ぶことからも得られることであろう。

どうしても若年期は目先のことに気持ちが傾いてしまう。至極当然であるが、その目先から一歩先、二歩先にどれだけ思いが馳せられるか、それもしっかりとした知識に基づいて。これが教養の根幹でもあり、生きる力に結びつくことと思うし、先人の導きも大切だ。一般論を述べる無駄を避けたいが、それらを踏まえなければ教養は考えられない。

15年前の平成14年中教審で「新しい時代における教養教育の在り方について」が答申されたが、細分化された学問体系や効率重視の情報社会が教養を軽視する土壌を否が応でも加速する危機感を指摘した。またその中で

自我の確立と目標意識を持った主体的行動を求める姿勢を育むことが魅力ある社会の実現につながることも述べられた。当時の具体的施策としては、幼・少年期においては集団のルールや規範に加えて基礎学力、意欲醸成、人間性の育成等が掲げられ、高等学校の青年期では論理的思考、目的意識に絡めた学習意欲、体験重視等が答申された。大学に至っては知的好奇心喚起、社会や異文化との交流を掲げ、教養教育を担う実施体制等の整備も指摘された。また成人の教養を涵養する内容も付記されたが、教養は誰もが必要と思う反面、成績や成果に直結し難い部分もある中での当時の文科省の旗振りには相応の意義があったと思う。

現在もこれらの施策が継続されていると信じたいが、現実的に教養があると感じる学生は減少したように思われる。当時よりもネット上での情報が増加かつ多様化しており、若者の関心や探求するためのソースがネットに移行して視野の狭窄を進めている。当時の答申の幼・少年期の課題のとおり、12、13歳ごろまでに受容体としての社会性を育む必要性がある。教養を育むための資質や能力の低下に歯止めをかけるためには、ネットや情報ツールを教育にどの規模で活用するか改めて考える必要もあるだろう。

3 資質･能力と情緒

教養が広く社会的な共通の認識を得るための資質・能力であるとするならば、情緒は極めて個人の心の内での働きであり、物事の感じ方を中心とした人間性に影響がある資質・能力といえる。感じ方に加えて喜怒哀楽をともなう精神所作の活動が情緒だが、個人の資質としては感性が豊かであるとか、感受性が豊富である、という点が情緒豊かな人間と評価される。情緒も社会で生きるためには相応に必要な資質であり能力である。まして人間関係や円滑な物事の進捗には時に情緒が豊かな場合がうまくいく。

たとえば企業の営業活動の場面において、ビジネス上必要な商品の説明や価格交渉だけで取引先と望ましいコミュニケーションが築けるだろうか。ビジネスライクに徹するならば余計な会話は無駄である。しかしながら、ビジネスの場面も人間同士の交渉ごとである。円滑な交渉や納得できる商取引を望むとき、交渉相手の人間性や信頼感を推し量りたい。会話の端々に潜む交渉相手の人柄や信頼できるかどうかを最初に判断する。切れる人、推しが強い人、情熱ある人、バックグラウンドでよくいろいろなことを知っているな、見識があるなと、ビジネスに直結したこと以外で魅力を感じることは多々ある。ましてや趣味・嗜好が合った場合は仕事内容を離れての交流も生まれる。ビジネス本来の取引が優先されることは当然であるが、交渉相手同士の共感・共鳴から生じた相手を信じて一歩踏み出す可能性は侮れない。共感を得る場面には趣味・嗜好を通じた双方の楽しみや喜びを尊重し合う交流が役立ち、そこには情緒的な資質が影響するといえるだろう。

情緒は人が成長する過程で様々な経験から培われるが、最近は感情の起伏に乏しい子どもが多くなったと嘆く声が聞こえる。感情は喜怒哀楽を基本として豊かになり、それらを触発する適度な外的刺激が必要とされる。学校など集団生活の場で自分の思い通りにならない場面では、人間関係のぶつかり合いの厳しさを学び、さらに感情が豊かになる。また、スポーツや課外活動などの努力が報われる、報われない場面からは、嬉しさ、悔しさ、後悔など、様々な起伏ある心の動きが醸成されるだろう。優れた表現されたもの、文学、映画、音楽、絵画、ゲームなど、疑似体験も含めたことやものに触れることも、心が揺さぶられる。これら幼少期からの積み上げられていく心の経験が、後の資質・能力として雪だるま的に大きくなっていくと思われる。

幼少期の集団生活がトラブルを避ける楽しいものばかりになるとしたら、子どもは集団での立ち位置に戸惑う経験が不足して、常にお膳立てされた集団環境に慣れてしまう。用意された集団の輪では良い子を演じることに慣れ、その影では悩み、時には逸脱する可能性もある。逸脱の方向は孤立や他者への過剰な攻撃に変わる場合もあるだろう。集団生活に馴染むための情緒は他者への痛みを理解して、他者への気遣いや慈しみにつながっていく。そのような心の育ちが必要であり、手段での成否併

せ持った実体験がなによりも糧となるが、その心の情動を後方支援するものとしての豊かな感性を育む情緒体験が役立つと確信できる。

4 資質・能力と教育

今井むつみ氏は著書「学びとは何か」でフロリダ州立大学のエリクソン教授の研究を取り上げ、超一流の熟達者は自分一人での練習に打ち込む時間を大事にすることを紹介している。ここでの熟達者とは芸術家やスポーツプレイヤーなどを指しているが、今井氏は子どもの学習スタイルに言及する。すなわち自分で工夫しながら自分一人で学ぶ習慣と学び方を子ども時代に身につけるという指摘である。一流になるためには10,000時間が必要であるようで、日数に換算して417日、1日24時間の内6時間をその時間に当てるとその4倍がかかり、1,668日である。単純に考えれば4年半だが、休日や1日6時間の確保に厳しい場合を考慮すると6年くらいだろうか。小学校の年数である。もし中学校の3年を加えれば誰しもが一流の教育成果を発揮する生徒となる理屈になるが、現実はそうではない。芸術やスポーツの一流を目指すモチベーションと義務教育への参加は比較対象にならないので机上の空論となることは必至であるが、何か考えさせられるものがある。

理屈的にいえば義務教育が終わるころには、子どもは本来的には基礎学力のマスターとなり、高等教育へ向かう資質・能力に長けた逸材となるはずだ。しかしながら現実はそうではない。落ちこぼれる、登校拒否となる、そこまでいかずとも同級生への劣等感に悩む。やらされている感が強い学校教育で、進んで取り組む、流行りのことばで言うところの主体性をいかに育むかがキーとなりそうだ。主体性は個の学びが主体となって学習習慣や情緒を伸ばすことが原点であると思うので、無難な集団活動よりも個が関心を持つことに集中させることに最初は注力することが必要ではないか。「主体的な学び」の重要性が問われるが、そもそも主体的になるためには学習者個々の学びに対する目的やモチベーションが存在しない段階では意味をなさないだろう。

米国のTEDカンファレンスは学術・エンターテインメント等の分野で功績のある人物が講演することで有名だが、5年ほど前にスーザン・ケイン氏が登壇した。同氏は「内向的な人が秘めている力」というタイトルで講演し、自身のハイスクール時代のキャンプでの集団活動を話題にした。家族ぐるみで読書習慣があり、キャンプでも友人と読書を楽しむことを想像した彼女の期待は裏切られ、パーティー等で騒ぐことを強いられた時間だったという。彼女はその例から、欧米では社交的で人の前に先んじて出ることが美徳と思われがちだが、内向的な人も存在し、彼らの力をもっと引き出すべきだと主張する。学校や職場が外交的な人向けにつくられていることへの疑問を指摘し、思考力を育む作文でさえもグループ作業に委ねる風潮に警鐘を鳴らした。一弁護士の体験と主張であるが、日本の教育もそのようなグループ作業に傾倒する傾向がある中、個の思考力を伸ばすために一人で集中することの重要さを今一度見直すことも必要なのではないかと改めて考えさせられる。

平成29年3月公示の学習指導要領では、資質・能力を一層確実に育成することを説く。道徳教育の充実や体験活動の重視、体育・健康に関する指導の充実、豊かな心や健やかな体を育成すべきとの考え方を示した。とても賛同したい内容である。しかしながら同要領に対するパブリックコメントでは、総合的な学習時間70時間のうち15時間を外国語、外国語活動に割り当てることに対して批判的な意見が出されている例からも、先ほどの育成の考え方と方向がやや異なることには疑問を感じる。また資質・能力を規定することなどは自由な成長を侵しかねないとの厳しい意見もあった。国の教育方針を否定するつもりはないが、国まかせの私たちが正すべき姿勢はないだろうか。子どもと関わる時間が激減する現代社会の家庭のあり方、結果を重視する視点が成長段階の子どもたちに及ぼす影響、集団活動に埋もれる個の学びの重要性など、一人一人が自分と向き合って学ぶ真の主体的学びを真剣に考えてみたいものである。

5 25年間のおわりに

最後に私的なことであるが、25年間奉職した目白学園・目白大学を今年度末で退職する。自己都合退職であるので、同僚や所属組織に迷惑をお掛けすること至極であり、お詫びの気持ちしか思い至らないのが正直なところである。身勝手な都合を置いて強いて述べれば、自身の教育者としての活動は達成には程遠かった。その間に関わってくれた学生諸氏には本当に申し訳ないと思う。ただし、稚拙ながらもよりよい教えを目指したい、社会に羽ばたく直前の学生に何かを掴んでほしいという気持ちでもがき苦しんだことは率直な思いであり、それは最後の日まで続く。

2002年4月から現在の社会情報学科に配属後、ゼミ学生の資質・能力向上に特に力を注いだ。学生との対話を第一に考えて、ゼミ授業以外でも個別面談授業等を展開してきたが、最近はその様相も変化してきた。2年前までは第一希望のゼミ生のみであったので、自身の専門分野（デザイン）に興味・関心を持った学生が集い、専門領域を学びの中心に据えていれば相思相愛の活発なゼミが展開できた。が、この2年間は希望順位が低い、もしくは希望していない学生が集まった。希望を外れた学生は、所属学科の学びの分野で一番人気があるマーケティング分野から漏れた学生が多かった。私的な職歴として前職が企業人であり、宣伝広告やブランドマネジメント部門を担当してきたので、若干のマーケティング、プロモーション領域に経験があったことで対応ができると思ったが、なかなか彼らの資質・能力を十分に引き出せなかった点は反省とともに深謝するしかない。

一つ感じることは、資質・能力が弱い場合でも時間を掛ければその芽を伸ばすことができるということである。ただし相当の時間が必要だと感じた。本来ならばそのような資質は大学生となる以前に伸ばされていることが理想であるかもしれない。しかしながら現実を直視するならば、どのような時期にあってもそれらにたゆまない努力をすることが教育者の務めである。道半ばで途中退場する身にあっては負け犬の遠吠えだ。

25年間に関わってくれた学生や職場の教職員の方々には感謝してもし尽くしきれない。この気持ちをここに留めたいと切に思う次第である。

エッセイでよろしいとの教育研究所のお言葉に甘えて、本稿が支離滅裂の雑感になった点は読者諸氏にお詫び申し上げたい。教育研究所の前身である女子教育研究所時代には、当時の同所が発行する「女子教育」誌の編集委員を担当させていただいた。当時の編集後記に自分の名前を見ると研究所にもたいへんとお世話になった記憶が鮮やかによみがえる。感慨深いものである。

末筆ではあるが、最後までわがままな校正にお付き合いくださった教育研究所の峯村氏に改めてお礼を述べたいと思う。

参考文献

文部科学省（平成14年度）『中央教育審議会答申』
今井むつみ著（2016）「学びとは何か－〈探求人〉になるために」岩波新書
スーザン・ケイン著、古草秀子訳（2013）「内向型人間の時代 社会を変える静かな人の力」講談社
文部科学省（平成29年3月公示）『学習指導要領「生きる力」』